

昭和二十八年一月十一日 初版印刷
昭和二十八年一月十五日 初版發行

昭和文學全集5

永井荷風集

著者 永井壯吉

發行者 角川源義

印刷者 小泉輝章

東京都文京區戶崎町七一

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社

クロース 日本クロース工業株式會社

印刷所 小泉印刷株式會社

製本所 小泉製本所

Printed in Japan

永井荷風集

昭和文學全集
角川書店版

目次

卷頭寫眞
筆蹟

漫東綺譚

つゆのあとさき

かし間の女

榎物語

夜の車

あぢさゐ

ひかげの花

おもかげ

女中のはなし

浮沈

勳章

問はず語り

踊子

來訪者

爲永春水

七 四 六 二八 二四 二七 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

荷風隨筆

三三

帝國劇場のオペラ

にくまれぐち

譯詩について

中村さんに質する文

正宗谷崎兩氏の批評に答ふ

三三
三三
三七
三九
四一

冬の蠅

四五

斷腸花

四五

きのふの淵

四七

寺じまの記

五一

西瓜

五一

雪の日

五二

葛飾土産

五六

葛飾土産

五六

東京風俗ばなし

五七

荷風百句

二七一
二七二
二七三

偏奇館吟草

二八二
二八三
二八四

解説
年譜

吉田精一
三七八

三八三

永井荷風集

牡

斗

月

散

ッ
下

雨
を
き
く

庵

あ
ら
う

荷
風

遷東綺譚

わたくしは殆ど活動寫眞を見に行つたことがない。

おぼろ氣な記憶をたどれば、少年のころ――明治二十四五年頃であらう。神田錦町に在つた貸席錦輝館で、サンフランシスコ市街の光景を寫したのを見たことがあつた。活動寫眞といふ言葉のできたのも恐らくはその時分からであらう。それから四十餘年を過ぎた今日では、活動といふ語は既にすたれて他のものに代はれてゐるらしいが、初めて耳にしたものゝ方が口馴れて言ひやすいから、わたくしは依然としてむかしの廢語をこゝに用いる。

震災の後、わたくしの家に遊びに來た青年作家の一人が時勢におくれるからと言つて、無理やりにわたくしを赤坂溜池の活動小屋に連れ行つたことがある。何でも其頃非常に評判の好いものであつたといふが、見ればモオパッサンの短篇小説を脚色したものであつたので、わたくしはあれなら寫眞を見るにも及ばない。原作をよめばいい。その方がもつ

と面白いと言つたことがあつた。

然し活動寫眞は老弱の別なく、今の人の喜んでこれを見て、日常の話柄にしてゐるものであるから、せめてわたくしも、人が何の話をしてゐるのかと云ふくらいゐる事は分るやうにして置きたいと思つて、活動小屋の前を通りかゝる時には看板の畫と名題とは勉めて目を向けるやうに心がけてゐる。看板を一瞥すれば寫眞を見ずとも脚色の梗概も想像がつくし、どういふ場面が喜ばれてゐるかと云ふ事も會得せられる。

活動寫眞の看板を一度に最多く一瞥する事のできるのは淺草公園である。こゝへ來ればあらゆる種類のものを一ト目に眺めて、おのづから其巧拙をも比較することが出来る。わたくしは下谷淺草の方面へ出掛ける時には必ず思出して公園に入り池の縁に杖を曳く。

夕風も追々寒くなつて來た或日のことである。一軒々々入口の看板を見盡して公園のはづれから千束町へ出たので、右の方は言問橋左の方は入谷町、いづれの方へ行かうかと思案しながら歩いて行くと、四十前後の古洋服を着た男がいきなり横合から現れ出て、

「懷那、御紹介しませう。いかゞです。」と言ふ。

「イヤありがたう。」と云つて、わたくしは少し歩調を早めると、

「絶好のチャンスですぞ。徹底的ですぞ。懷那。」と云つて尾いて來る。

「いらぬ。吉原へ行くんだ。」

ぼん引と云ふのか、源氏といふのかよく知らぬが、兎に角怪し氣な勸誘者を追ひ拂ふために、わたくしは口から出まかせに吉原へ行くと言つたのであるが、行先の定まらない散歩の方向は、却てこれがために決定せられた。歩いて行く中わたくしは土手下の裏町に古本屋を一軒知つてゐることを思出した。

古本屋の店は、山谷堀の流が地下の暗渠に接續するあたりから、大門前日本堤橋のたもとへ出ようとする薄暗い裏通に在る。裏通は山谷堀の水に沿うた片側町で、對岸は石垣の上に立續く人家の背面に限られ、此方は土管、地瓦、川土、材木などの問屋が人家の間に稍廣い店口を示してゐるが、堀の幅の狭くなるにつれて次第に貧氣な小家がらになつて、夜は堀にかけられた正法寺橋、山谷橋、地方橋、髪洗橋、などいふ橋の灯がわづかに道を照すばかり。堀もつき橋もなくになると、人通りも共に途絶えてしまふ。この邊で夜も割合におそくまで灯をつけてゐる家は、かの古本屋と煙草を賣る荒物屋ぐらゐのものであらう。

わたくしは古本屋の名は知らないが、店に積んである品物は太抵知つてゐる。創刊當時の文藝俱樂部が古いやまと新聞の講談附録でもあれば、意外の掘出物だと思はなければならぬ。然しわたくしがわざ／＼廻り道までして、この店をたづねるのは古本の爲ではなく、古本を賣く亭主の人物と、廓外の裏町と

いふ情味との爲である。

主人は頭を綺麗に剃つた小柄の老人。年は無論六十を越してゐる。その顔立、物腰、言葉便から着物の着様に至るまで、東京の下町生粋の風俗が、そのまま崩れずに残されてゐるのが、わたくしの眼には稀観の古書よりも寧ろ尊くまた懐しく見える。震災のころまでは芝居や寄席の樂屋に行くと一人や二人、かういふ江戸下町の年寄に逢ふことができた。一たとへば音羽屋の男衆の留爺やだの、高嶋屋の使つてゐた市藏などいふ年寄達であるが、今はいづれもあの世へ行つてしまつた。

古本屋の亭主は、わたくしが店先の硝子戸をあける時には、いつでもきまつて、中仕切の障子際にきちんと坐り、圓い背を少し斜に外の方へ向け、鼻の先へ落ちかゝる眼鏡をたよりに、何か讀んでゐる。わたくしの來る時間も大抵夜の七八時ときまつてゐるが、その度毎に見る老人の坐り場所も其の形も殆どきまつてゐる。戸の明く音に、折かざんだまゝ、首だけひよいと此方へ向け、

「おや、入つしやいまし。」と眼鏡をはづし、中腰になつて座布團の塵をぼんと叩き、匍ふやうな腰付で、それを敷きのべながら、さて丁寧に挨拶をする。其言葉も様子も亦型通りに變りがない。

「相變らず何も御在ません。お目にかけけるやうなものは。たしか芳譚新誌がありました。揃つちや居りません。」

「爲永春江の雜誌だらう。」

「へえ。初號がついて居りますから、まあお目にかけられます。おや、どこへ置いたかな。」と敷居際に積重ねた古本の間から合本五六冊を取出し、兩手でばた／＼塵をはたいて差出すのを、わたくしは受取つて、

「明治十二年御国としてあるね。この時分の雜誌をよむと、生命が延るやうな氣がするね。魯文珍報も全部揃つたのがあつたら欲しいと思つてゐるんだが。」

「時々出るにや出ますが、大抵ばら／＼で御在ましてな。懷那、花月新誌はお持合せで被居りますか。」

「持つてゐます。」

硝子戸の明く音がしたので、わたくしは亭主と共に見返ると、これも六十あまり。頗のこけた禿頭の貧相な男が汚れた綿の風呂敷包を店先に並べた古本の上へ卸しながら、

「つく／＼自動車はいやだ。今日はすんでの事に殺されるところさ。」

「便利で安くつてそれで間違ひがないなんて、そんなものは滅多にないよ。それでも、お前さん。怪我アしなさらなかつたのか。」

「お守が割れたおかげで無事だつた。衝突したア先へ行くバスと圓タクだがね、思出しでもぞつとするね。實は今日鳩ヶ谷の市へ行つたんだがね、妙な物を買つた。昔の物はいね。さし當り捌口はないんだが見るとつい道樂がしたくなる奴さ。」

禿頭は風呂敷包を解き、女物らしい小紋の單衣と胴拔の長襦袢を出して見せた。小紋は風地の小漬ちりめん、胴拔の袖にした友禪染も一寸變つたものではあるが、いづれも維新前後のものらしく特に古代といふ程の品ではない。

然し浮世繪肉筆物の表装とか、近頃はやる手文庫の中張りとか、又草双紙の帙などに用いたら案外いかも知れないと思つたので、其場の出来心からわたくしは古雜誌の勘定をするついでに胴拔の長襦袢一枚を買取り、坊主頭の亭主が芳譚雜誌の合本と共に紙包にくくれるのを抱へて外へ出た。

日本堤を往復する乗合自動車に乘るつもりで、わたくしは暫く大門前の停留場に立つてゐたが、流しの圓タクに塵をかけられるのが煩いので、もと來た裏通へ曲り、電車と圓タクの通らない薄暗い横町を擇み／＼歩いて行くと、忽ち樹の間から言問橋の灯が見えるあたりへ出た。川端の公園は物騒だと聞いてゐたので、川の岸までは行かず、電燈の明るい小徑に沿うて、鎖の引廻してある其上に腰をかけた。

實は此方へ來るがけに、途中で食麵と雑誌とを買ひ、風呂敷へ包んでゐたので、わたくしは古雜誌と古着とを一緒に包み直して見たが、風呂敷がすこし小さいばかりか、堅い物と柔いものとはどうも一緒にうまく包めない。結局雑誌だけは外套のかくしに收め、

残の物を一つにした方が持ちよいかと考へて、芝生の上に風呂敷を平にひろげ、類に鹽梅を見てみると、いきなり後の木陰から、「おい、何をしてゐるんだ。」と云ひさま、サアベの音と共に、巡査が現れ、猿轡を伸してわたくしの肩を押へた。

わたくしは返事をせず、靜に風呂敷の結目を直して立上ると、それさへ待どしいと云はぬばかり、巡査は後からわたくしの脇を突き、「其方へ行け。」

公園の小徑をすぐさま言間橋の際に出ると、巡査は廣い道路の向側に在る派出所へ連れて行き立番の巡査にわたくしを引渡したまま、急いさうにまた何處へか行つてしまつた。派出所の巡査は入口に立つたまゝ、「今時分、何處から來たんだ。」と尋問に取りかゝつた。

「向の方から來た。」

「向の方とは何方の方だ。」

「堀の方からだ。」

「堀とはどこだ。」

「眞土山の麓の山谷堀といふ川だ。」

「名は何と云ふ。」

「大江匡。」と答へた時、巡査は手帳を出したので、「匡は」に王の字をかきます。一たび天下ヲ匡スと論語にある字です。

巡査はだまれと言はぬばかり、わたくしの顔を睨み、手を伸していきなりわたくしの外套の釦をはづし、裏を返して見て、

「記號はついてゐないな。」つゞいて上着の裏を見ようとする。

「記章とはどう云ふ記章です。」とわたくしは風呂敷包を下に置いて、上着と胴着の胸を一度にひろげて見せた。

「住所は。」

「麻布區御軍箭町一丁目六番地。」

「職業は。」

「何にもしてゐません。」

「無職業か。年はいくつだ。」

「己の卯です。」

「いくつだよ。」

「明治十二年己の卯の年。」それきり黙つてゐようかと思つたが、後がこはいひので、「五十八。」

「いやに若いな。」

「へへへ。」

「名前は何と云つたね。」

「今言ひましたよ。大江匡。」

「家族はいくたりだ。」

「三人。」と答へた。實は獨身であるが、今日の經驗で、事實を云ふと、いよく怪しまれる傾があるで、三人と答へたのである。

「三人と云ふのは奥さんと誰だ。」巡査の方がいゝ様に解釋してくれる。

「嘘アとばゝア。」

「奥さんはいくつだ。」

一寸窮つたが、四五年前まで姑く關係のあつた女の事を思出して、「三十一。明治三十九

年七月十四日生 丙午……。」

若し名前をきかれたら、自作の小説中にある女の名を言はうと思つたが、巡査は何にも云はず、外套や背廣のかくしを上から押へ、「これは何だ。」

「パイプに眼鏡。」

「うむ。これは。」

「鑷詰。」

「これは、紙入だね。鳥渡出して見せたまへ。」

「金はいつて居ますよ。」

「いくら遣入つてゐる。」

「サア二十三十圓もありませうかな。」

巡査は紙入を抜き出したが中は改めずに電話機の下に据ゑた卓子の上に置き、

「その包は何だね。こつちへ遣入つてあけて見せたまへ。」

風呂敷包を解くと紙につつんだ麵麩と古雑誌まではよかつたが、胴拔の艶めかしい長襦袢の片袖がだらりと下るや否や、巡査の態度と語調とは忽ち變して、

「おい、妙なものを持つてゐるな。」

「いや、はゝゝゝは。」とわたくしは笑出した。

「これは女のきるもんだな。」巡査は長襦袢を指先に摘み上げて、燈火にかざしながら、わたくしの顔を睨み返して、「どこから持つて來た。」

「古着屋から持つて來た。」

「どうして持つて来た。」

「金を出して買った。」

「それはどこだ。」

「吉原の大門前。」

「いくらで買った。」

「三圓七十錢。」

巡査は長襦袢を卓子の上に投捨てたり黙つてわたくしの顔を見てゐるので、大方警察署へ連れて行つて豚箱へ投込むのだらうと、初めのやうにからかふ勇氣がなくなり、此方も巡査の様子を見詰めてゐると、巡査は矢張だまつたまゝわたくしの紙入を調べ出した。紙入には入れ忘れたまゝ折目の破れた火災保険の假證書と、何かの時に入用であつた戸籍謄本に印鑑證明書と實印とが這入つてゐたのを、巡査は一枚々々靜にのべひろげ、それから實印を取つて篆刻した文字を燈火にかざして見たりしてゐる。大分暇がかゝるので、わたくしは入口に立つたまゝ道路の方へ目を移した。

道路は交番の前で斜に三筋に分れ、その一筋は小塚ッ原、一筋は白鬚橋の方へ走り、これと交叉して淺草公園裏の大通が言問橋を渡るので、交通は夜になつてもなか／＼頻繁であるが、どういふことか、わたくしの尋問されるのを怪しんで立止る通行人は一人もな。向側の角のシャツ屋では女房らしい女と小僧とがこつちを見てゐながら更に怪しむ様子をもなく、そろ／＼店をしまひかけた。

「おい。もういゝからしまひたまへ。」

「別に入用なものでもありませんから……。」

「吹きながらわたくしは紙入をしまひ風呂敷包をもとのやうに結んだ。」

「もう用はありませんか。」

「ない。」

「御苦勞さまでしたな。」わたくしは巻煙草も金口のウエストミンスターにマツチの火をつけ、煙だけでもかいで置けと云はぬばかり、煙を交番の中へ吹き散して足の向くまゝ言問橋の方へ歩いて行つた。後で考へると、戸籍謄本と印鑑證明書とがなかつたなら、大方その夜は豚箱へ入れられたに相運ない。一體古着は氣味のわるいものだ。古着の長襦袢が祟りそこねたのである。

二

「失踪」と題する小説の腹案ができた。書き上げることができたなら、この小説はわれながら、さほど拙劣なものでもあるまいと、幾分か自信を持つてゐるのである。

小説中の重要な人物を、種田順平といふ。

年五十餘歳、私立中學校の英語の教師である。

種田は初婚の戀女房に先立たれてから三四年にして、繼妻光子を迎へた。

光子は知名の政治家某の家に雇はれ、夫人付の小間使となつたが、主人に欺むかれて身重になつた。主家では其執事遠藤某をして後の始末をつけさせた。其條件は光子が無

事に産をしたなら二十個年子供の養育費として毎月五拾圓を送る。其代り子供の戸籍については主家では全然與り知らない。又光子が他へ嫁する場合には相當の持參金を贈ると云ふやうな事であつた。

光子は執事遠藤の家へ引取られ男の兒を産んで六十日たつか經たぬ中矢張遠藤の媒介で中學校の英語教師種田順平なるものゝ後妻となつた。時に光子は十九、種田は三十歳であつた。

種田は初めの戀女房を失つてから、薄給な生活の前途に何の希望を見ず、中年に近くに従つて元氣のない影のやうな人間になつてゐたが、舊友の遠藤に説きすゝめられ、光子母子の金にふと心が迷つて再婚をした。其時子供は生れたばかりで戸籍の手續もせずにあつたので、遠藤は光子母子の籍と一緒に種田の家に移した。それ故後になつて戸籍を見ると、種田夫婦は久しく内縁の關係をつゞけてゐた後、長男が生れた爲、初めて結婚入籍の手續をしたものゝやうに思はれる。

二年たつて女の兒が生れ、つゞいて又男の兒が生れた。

表面は長男で、實は光子の連子になる爲年が丁年になつた時、多年祕密の父から光子の手許に送られてゐた教育費が途絶えた。約束の年限が終つたばかりではない。實父は先年病死し、其夫人も亦つゞいて世を去つた故である。

長女芳子と季兒爲秋の成長するに従つて生活費は年々多くなり、種田は三三軒學校を掛持ちして歩かねばならない。

長男爲年は私立大學に在學中、スポーツマンとなつて洋行する。妹芳子は女學校を卒業するや否や活動女優の花形となつた。

繼妻光子は結婚當時は愛くるしい圓顔であつたのがいつか肥満した婆となり、日蓮宗に凝りかたまつて、信徒の團體の委員に擧げられてゐる。

種田の家は或時は宛ら講中の寄合所、或時は女優の遊び場、或時はスポーツの練習場もよろしくと云ふ有様。その騒しさには臺所にも鼠が出ないくらいである。

種田はもと／＼氣の弱い交際嫌ひな男なので、年を取るにつれて家内の喧騒には堪へられなくなる。妻子の好むものは悉く種田の好まぬものである。種田は家族の事については勉めて心を留めないやうにした。おのれの妻子を冷眼に視るのが、氣の弱い父親のせめてもの復讐であつた。

五十一歳の春、種田は教師の職を罷められた。退職手當を受取つた其日、種田は家にかへらず、跡をくらましてしまつた。

是より先、種田は嘗て其家に下女奉公に來た女すみ子と偶然電車の中で邂逅し、其女が淺草駒形町のカツフェーに働いてゐる事を知り、一二度おとづれてビールを酔を買つた事がある。

退職手當の金をふところにした其夜である。種田は初めて女給の部屋借をしてゐるアパートに行き、事情を打明けて一晩泊めてもつた。

*

それから先どういふ風に物語の結末をつけたいものか、わたくしはまだ定案を得ない。

家族が搜索願を出す。種田が刑事に捕へられて説諭せられる。中年後に覺えた道義は、むかしから七ツ下りの雨に譬へられてゐるから、種田の末路はわけなくどんなにでも悲慘にすることが出来るのだ。

わたくしはい／＼に種田の墮落して行く道筋と、其折々の感情とを考へつゞけてゐる。刑事につかまつて拘引されて行く時の心持、妻子に引渡された時の當惑と面目なさ。其身になつたらどんなものだらう。わたくしは山谷の裏町で女の古着を買つた歸り道、巡查につかまり、路端の交番で厳しく身元を調べられた。この経験は種田の心理を描寫するには最も都合の好い資料である。

小説をつくる時、わたくしの最も興を催すのは、作中人物の生活及び事件が開展する場所の選擇と、その描寫とである。わたくしは、人物の性格よりも背景の描寫に重きを置き過ぎるやうな誤に陥つたこともあつた。

わたくしは東京市中、古來名勝の地にして、

震災の後新しき町が建てられて全く舊觀を失つた、其狀況を描寫したいが爲に、種田先生の潜伏する場所を、本所か深川か、もしくは淺草のはづれ。さなくば、それに接した舊郡部の陋巷に持つて行くことにした。

これまで折々の散策に、砂村、龜井戸、小松川、寺島町あたりの景況には既に大略述じてゐるつもりであつたが、いざ筆を着けようとするに、俄に觀察の至らない氣がして來る。曾て、明治三十五六年の頃、わたくしは深川洲崎遊廓の娼妓を主題にして小説をつくつた事があるが、その時これを讀んだ友人から、「洲崎遊廓の生活を描寫するのに、八九月頃の暴風雨や海嘯のことを寫さないのは杜撰の甚しいものだ。作者先生のお通ひなすつた甲子樓の時計臺が吹き倒されたのも一度や二度のことではなからう」と言はれた。背景の描寫を精細にするには季節と天候にも注意しなければならぬ。例へばラフカディオ・ハーン先生の名著「チタ」或は「ユーマ」の如くに。六月末の或夕方である。梅雨はまだ明けてはゐないが、朝から好く晴れた空は、日の長いころの事で、夕飯をすまして、まだたそがれようとししない。わたくしは箸を擱くと共にすぐさま門を出て、遠く千住なり龜井戸なり、足の向く方へ行つて見るつもりで、一先電車で雷門まで往くと、丁度折好く來合せたのは寺島玉の井としてある乗合自動車である。

吾妻橋をわたり、廣い道を左に折れて源森橋をわたり、眞直に秋葉神社の前を過ぎて、また姑く行くと車は線路の踏切でとまった。

踏切の兩側には柵を前にして圓タタキや自轉車が幾輛となく、貨物列車のゆる／＼通り過るのを待つてゐたが、歩く人は案外少く、貧家の子供が幾組となく群をなして遊んでゐる。降りて見ると、白髻橋から龜井戸の方へ走る廣い道が十文字に交錯してゐる。ところ／＼草の生えた空地があるのと、家並が低いので、どの道も見分のつかぬほど同じやうに見え、行先はどこへ續くのやら、何となく物淋しい氣がする。

わたくしは種田先生が家族を棄てゝ世を忍ぶ處を、この邊の裏町にして置いたら、玉の井の盛場も程近いので、結末の趣向をつけるにも都合がよからうと考へ、一町ほど歩いて狭い横道へ曲つて見た。自轉車も小脇に荷物をつけたものは、摺れちがふ事が出来ないくらゐる狭い道で、五六歩行くごとに曲つてゐるが、兩側とも割合に小綺麗な耳門のある借家が並んでゐて、勤先からの歸りとも見える洋服の男や女が一人二人づつ前後して歩いて行く。遊んでゐる犬を見ても首環に鑑札がつけてあつて、左程汚らしくもない。忽にして東武鐵道玉の井停車場の横手に出た。

線路の左右に樹木の鬱然と生茂つた廣大な別荘らしいものがある。吾妻橋からこゝに來るまで、このやうに老樹の茂林をなした處は

一箇所もない。いづれも久しく手入をしないと見えて、匍ひのぼる蔓草の重さに、竹藪の竹の低くしなつてゐるさまや、溝際の生垣に夕顔の咲いたのが、いかにも風雅に思はれてわたくしの歩みを引止めた。

むかし白髻さまのあたりが寺島村だといふ話をきくと、われ／＼はすぐに五代目菊五郎の別荘を思出したものであるが、今日たまたまこの處にこのやうな庭園が残つたのを目にすると、そゝろに過ぎ去つた時代の文雅を思ひ起さずには居られない。

線路に沿うて賣貨地の札を立てた廣い草原が鐵橋のかゝつた土手際に達してゐる。去年頃まで京成電車の往復してゐた線路の跡で、崩れかゝつた石段の上には取拂はれた玉の井停車場の跡が雜草に蔽はれて、此方から見ると城址のやうな趣をなしてゐる。

わたくしは夏草をわけて土手に登つて見た。眼の下には遮るものもなく、今歩いて來た道と空地と新開の町とが低く見渡されるが、土手の向側は、トタン葺の陋屋が秩序もなく、端しもなく、ごた／＼に建て込んだ間から湯屋の煙突が屹立して、その頂きに七八日頃の夕月が懸つてゐる。空の一方には夕榮の色が薄く残つてゐながら、月の色には早くも夜らしき輝きができ、トタン葺の屋根の間からはネオンサインの光と共にラディオの響が聞え初める。

わたくしは脚下の暗くなるまで石の上に腰をかけてゐたが、土手下の窓々にも灯がついて、むさくるしい二階の内がすつかり見下されるやうになつたので、草の間に残つた人の足跡を辿つて土手を降りた。すると意外にも、其處はもう玉の井の盛場を斜に貫く繁華な横町の半程で、ごた／＼建て連つた商店の間の路地口には「ぬけられます」とか、「安全通路」とか、「京成バス近道」とか、或は「オートメ街」或は「賑本通」など書いた灯がついてゐる。

大分その邊を歩いた後、わたくしは郵便箱の立つてゐる路地口の煙草屋で、煙草を買ひ、五圓札の剩錢を待つてゐた時である。突然、「降つてくるよ。」と叫びながら、白い上ツ張を着た男が向側のおでん屋らしい暖簾のかげに馳け込むのを見た。つゞいて割烹着の女や通りがかりの人がばた／＼馳け出す。あたりが俄に物氣立つかと思へる間もなく、吹落る疾風に霞や何かの倒れる音がして、紙屑と塵芥とが物の怪のやうに道の上を走つて行く。やがて稻妻が鋭く閃き、ゆるやかな雷の響につれて、ポツリ／＼と大きな雨の粒が落ちて來た。あれほど好く晴れた夕方の天氣はいつの間にか變つてしまつたのである。

わたくしは多年の習慣で、傘を持たずに門を出ることは減多にない。いくら晴れてゐても入梅中のことなので、其日も無論傘と風呂敷とだけは手にしてゐたから、さして驚きもせず、靜にひろげる傘の下から空と町のさま

とを見ながら歩きかけると、いきなり後方から、「柳那、そこまで入れてつてよ。」といひさま、傘の下に眞白な首を突込んだ女がある。油の匂で結つたばかりと知られる大きな漬し島田には長目に切つた銀糸をかけてゐる。わたくしは、今方通りがかりに硝子戸を明け放した女髪結の店のあつた事を思出した。

吹き荒れる風と雨とに、結立の簷にかけた銀糸の亂れるのを、いたゞしく見えたので、わたくしは傘をさし出して、「洋服だからわたしは濡れても平氣だ。貸して上げるよ。」實は店つゞきの明い燈火に、流石のわたくしも相合傘には少し恐縮したのである。「すみません。すぐそです。」と女は傘の柄につかまり、片手に浴衣の裾を思ふさままくり上げた。

三

またばかりと閃き、ごろ／＼と鳴ると、女はわざとらしく「あら」と叫び、一步後れて歩かうとするわたくしの手を取り、「早くよ。あなた。」ともう馴れ／＼しい調子である。

「いゝから先へお出で。ついて行くから。」路地へ這入ると、女は曲るたび毎に、迷はぬやうにわたくしの方に振り返りながら、やがて薄にかゝつた小橋をわたり、軒並一帯に葎實の日蔽をかけた家の前に立留つた。

「あら、あなた。大變に濡れちまつたわ。」と傘をつぼめ、自分のものよりも先に掌でわ

たくしの着物の雪を拂ふ。

「こゝがお前の家か。」

「拭いて上げるから、寄つていらつしやい。」

「洋服だからいゝよ。」

「拭いて上げるつていふのにさ。わたしだつてお禮がしたいわよ。」

「どんなお禮だ。」

「だから、まアお這入りなさい。」

雷の音は少し遠くなつたが、雨は却て驟を打つやうに一層激しく降りそゞいで來た。

軒先に掛けられた日蔽の下に居ても跳上る飛沫の烈しさに、わたくしは兎や角言ふ暇もなく内へ這入つた。

荒い大阪格子を立てた中仕切へ、鈴のついたりボンの簾が下けてある。其下の上框に腰をかけて靴を脱ぐ中に女は雑巾で足をふき、端折つた裾もおろさず下座敷の電燈をひねり、

「誰もあないから、お上んなさい。」

「お前一人か。」

「えゝ。昨夜まで、もう一人居たのよ。住替に行つたのよ。」

「お前さんが御主人かい。」

「いゝえ。御主人は別の家よ。玉の井館つて云ふ寄席があるでせう。その裏に住宅があるのよ。毎晩十二時になると帳面を見にくるわ。」

「ちやア氣樂だね。」わたくしはすゝめられるがまゝ長火鉢の側に坐り、立膝して茶を入

れる女の様子を見やつた。

年は二十四五にはなつてゐるであらう。なかなかいゝ容貌である。鼻筋の通つた圓顔は白粉麿がしてゐるが、結立の島田の生際もまだ拔上つてはゐない。黒目勝の眼の中も曇つてゐず、唇や齒ぐきの血色を見ても、其健康はまださして破壊されても居ないやうに思はれた。

「この邊は井戸か水道か。」とわたくしは茶を飲む前に何氣なく尋ねた。井戸の水だと答へたら茶は飲む振りをして置く用意である。

わたくしは花柳病よりも寧チブスのやうな急激な傳染病を恐れてゐる。肉體的よりも夙

くから精神的癢人になつたわたくしの身には、花柳病の如き病勢の緩漫なものは、老後の今日、さして氣にはならない。

「顔でも洗ふの。水道なら其處にあるわ。」と女の調子は極めて氣輕である。

「うむ。後でいゝ。」

「上着だけおぬぎなさい。ほんとに随分濡れたわね。」

「ひどく降つてゐるな。」

「わたし雷さまより光るのがいやなの。これちやお湯にも行けやしない。あなた。まだいゝでせう。わたし顔だけ洗つて御化粧してしまふから。」

女は口をゆがめて、懷紙で生際の油をふきながら、中仕切の外の壁に取りつけた洗面器の前に立つた。リボンの簾越しに、兩肌を

ぬぎ、折りかゝんで顔を洗ふ姿が見える。肌は顔よりもずつと色が白く、乳房の形で、まだ子供を持った事はないらしい。

「何だか横那になつたやうだな。かうしてゐると、簞笥はあるし、茶棚はあるし……。」

「あけて御覧なさい。お幸か何かある筈よ。」
「よく片づいてゐるな。感心だ。火鉢の中なんぞ。」

「毎朝、掃除だけはちやんとしますもの。わたし、こんな處にゐるけれど、世帯持は上手なのよ。」

「長くゐるのかい。」

「まだ一年と、ちよつと……。」

「この土地が初めてぢやないんだらう。藝者でもしてゐたのかい。」

汲みかへる水の音に、わたくしの言ふことが聞えなかつたのか、又は聞えない振りをしたのか、女は何とも答へず、肌ぬぎのまゝ、鏡臺の前に坐り毛筋棒で髪を上げ、肩の方から白粉をつけ初める。

「どこに出てゐたんだ。こればかりは隠せるものぢやない。」

「。」

「東京のあまはりか。」

「いゝえ。ずつと遠く……。」

「ぢや、満洲……。」

「京都の宮にゐたの。着物もみんなその時分のよ。これで澤山たわねえ。」と言ひながら立上つて、衣紋竹に掛けかけた襦袢様の單衣物に着

かへ、赤い辨慶縞の伊達締を大きく前で結ぶ様子は、少し大き過ぎる濱島田の銀糸とつりあつて、わたくしの目にはどうやら明治年間の娼妓のやうに見えた。女は衣紋を直しながらわたくしの側に坐り、茶臺の上からバットを取り、

「縁起だから御祝儀だけつけて下さいね。」と火をつけた一本を差出す。

「わたくしはまんざら此の土地の遊び方を知らないのでもなかつたので、

「五十銭だね。おぶ代は。」

「えゝ。それはおきまりの御規則通りだわ。」と笑ひながら出した手の平を引込まさず、そのまゝ差伸してゐる。

「ぢや、一時間ときめよう。」

「すみませんね。ほんたうに。」

「その代り。」と差出した手を取つて引寄せ、耳元に囁くと、

「知らないわよ。」と女は目を見張つて脱返し、「馬鹿。」と言ひさまたわたくしの肩を撲つた。

爲永春水の小説を讀んだ人は、作者が敘事の

ところへ自家辯護の文を挟んでゐることを知つてゐるであらう。初恋の娘が恥しさを忘れて思ふ男に寄添ふやうな情景を書いた時には、その後で、讀者はこの娘がこの場合の様子や言葉便のみを見て、淫奔娘だと断定してはならない。深窓の女も意中を打明け

る場合には藝者も及ばぬ艶めかしい様子になることがある。また、既に里馴れた遊女が偶然幼馴染の男にめぐり會ふところを寫した時には、商賈人でも斯う云ふ時には娘のやうにもぢくするもので、これはこの道の経験に富んだ人達の皆承知してゐるところで、作者の觀察の至らないわけではないのだから、そのつもりでお讀みなさいと云ふやうな事が書添へられてゐる。

わたくしは春水に倣つて、こゝに刺語を加へる。讀者は初めて路傍で逢つた此女が、わたくしを遇する態度の馴々し過ぎるのを怪しむかも知れない。然しこれは實地の遭遇を潤色せず、そのまゝ記述したのに過ぎない。何の作意も無いのである。驟雨雷鳴から事件の起つたのを見て、これ亦作者常套の筆法だと笑ふ人もあるだらうが、わたくしは之を慮るがために、わざと事を他に設けることを欲しない。夕立が手引をした此夜の出来事が、全く傳統的に、お説通りであつたのを、わたくしは却て面白く思ひ、實はそれが書いて見たいために、この一篇に筆を執り初めたわけである。

一體、この盛場の女は七八百人と數へられてゐるさうであるが、その中に、島田や丸鬚に結つてゐるものは、十人に一人くらゐ。太體は女給まがひの日本風と、ダンサア好みの洋装とである。雨宿をした家の女が極く少數の舊風に屬してゐた事も、どうやら陳腐の筆

法に適當してゐるやうな心持がして、わたくしは事實の描寫を傷けるに忍びなかつた。

雨は歇まない。

初め家へ上つた時には、少し聲を高くしなければ話が聞きとれない程の降り方であつたが、今では戸口へ吹きつける風の音も、雷の響も歇んで、亜鉛葺の屋根を撲つ雨の音と、雨だれの落ちる聲ばかりになつてゐる。路地には久しく人の聲も聲も途絶えてゐたが、突然、

「アラ／＼大變だ。きいちやん。鰻が泳いでるよ。」といふ黄いろい聲につれて下駄の音がした。

女はつと立つてリボンの間から土間の方を覗き、「家は大丈夫だ。蔦があふれると、此方まで水が流れてくるんですよ。」

「少しは小降りになつたやうだな。」

「宵の口に降るとお天氣になつても駄目なのよ。だから、ゆつくりしてゐらつしやい。わたし、今の中に御飯たべてしまふから。」

女は茶棚の中から澤庵漬を山盛りにした小皿と、茶漬茶碗と、それからアルミの小鍋を出して、鳥渡蓋をあけて匂をかき、長火鉢の上に載せるのを、何かと見れば薩摩芋の煮たのである。

「忘れてゐた。いゝものがある。」とわたくしは京橋で乗換の電車を待つてゐた時、淺草吾を買つたことを思ひ出して、それを出した。「奥さんのお土産。」

「おれは一人なんだよ。食べるものは自分で買はなけれア。」

「アパートで彼女と御一緒。ほゝゝゝほ。」

「それなら、今時分うろついちやア居られない。雨でも雷でも、かまはず歸るさ。」

「さうねえ。」と女はいかにも尤だと云ふやうな顔をして暖くなりかけたお鍋の蓋を取り、「一緒にどう。」

「もうたべた。」

「ぢやア。あなたは向をむいて居らつしやい。」

「御飯は自分で炊くのかい。」

「住宅の方から、お晝と夜の十二時に持つて来てくれるのよ。」

「お茶を入れ直さうかね。お湯がぬるい。」

「あら。はぶかりさま。ねえ。あなた。話をしながら御飯をたべるのは楽しいやな。」

「一人ツきりの、すつぽり飯はいやだな。」

「全くよ。ぢやア、ほんとにお一人。かはいさうねえ。」

「察しておくれだらう。」

「いゝの、さがして上げるわ。」

女は茶漬を二杯ばかり。何やらはいやいだ調子で、ぢやら／＼と茶碗の中で箸をゆすぎ、さも急いさうに皿小鉢を手早く茶棚にしまひながらも、顔を動して込上げる澤庵漬のおくびを押へつけてゐる。

戸外には人の足音と共に「ちよいと／＼」と呼ぶ聲が聞え出した。

「歇んだやうだ。また近い中に出て来よう。」

「きつと入らつしやいね。晝間でも居ます。」

女はわたくしが上着をきかけるのを見て、後へ廻り襟を折返しながら肩越しに頬を掻けて、「きつとよ。」

「何て云ふ家だ。こゝは。」

「今、名刺あげるわ。」

靴をはいてゐる間に、女は小窓の下に置いた物の中から三味線のバチの形に切つた名刺を出してくれた。見ると寺島町七丁目六十一番地（二部）安藤まさ方雪子。

「さよなら。」

「まつすぐにお歸んなさい。」

40

小説「失踪」の一節

吾妻橋のまん中ごろと覺しい欄干に身を倚せ、種田順平は松屋の時計を眺めては來かゝる人影に氣をつけてゐる。女給のすみ子が店をしまつてからわざ／＼廻り道をして來るのを待合してゐるのである。

橋の上には圓タタの外電車もバスももう通つてゐなかつたが、二三日前から俄の暑さに、シャツ一枚で涼んでゐるものもあり、包をかへて歸りをいそぐ女給らしい女の往き來もまだ途絶えずにゐる。種田は今夜すみ子の泊つてゐるアパートに行き、それからゆつくり行末の目當を定めるつもりなので、行つた先で、女がどうなるものやら、そんな事は更